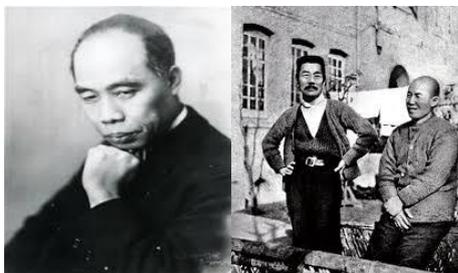


豊中日中友好協会設立 15 周年記念懇親夕食会
「西村真琴と魯迅」講演会及びパネル討論会に出席して
見本重宏

2月23日14時から豊中市のホテルアイボリーにて、
上海魯迅記念官長王錫榮先生(右写真)の講演、西村真琴
(俳優西村晃の父親、下写真左)氏や内山完造(下写真右：

内山書店創業者)氏の親族を交えたパネル討論会がありました。私は、西村氏の事や魯迅との
関係など全く知らず、今回初めて日中戦争の中で育んだ「秘められた物語」を知りました。中
国との関係が最悪な時期に、秘話が日中交流の原点の一つとして公知となり、日中両国民の融
和の切欠になることを切に望んでいます。

西村真琴の生涯(1883～1956)は、科学者(北大教授・博士)、教育家、新聞社員、日中友好家、



画家詩人、政治家(豊中市初代議長)等多方面な顔をもっ
ています。1939年、日中戦争孤児68名を大阪に受入れ
教育を施す等社会活動家としても活躍されました。

魯迅との関係は、奉仕団活動をする中で1932年上海
三義理街の廢墟の片隅で飛べなくなった一羽の餓えた
鳩を見つけた事です。

介抱しながら日本につれて帰り、鳩に「三義」と名づけ毎日新
聞社の鳩舎で育て、小鳩が生まれたら「日中友好の証」とし
て、中国に送る事を考えていたが残念ながら死んでしまった
為、三義塚を建立した。そこで、悲しんだ博士は、鳩「三義」
の絵と共に「西東国こそ異へ小鳩等は親善あり一つの巣箱に」
の歌を添え、内山完造氏を介して中国の文学者・思想家魯迅に贈った事から日中交流秘話が始
まります。

受け取った魯迅は感激し1933年七言律詩「三義塔に題す」を詠み、この不朽の名詞を博士
に贈りました。現在、三義塚及び詩碑は「西村真琴と魯迅の交流、平和のシンボル」として豊
中市で顕彰されている。魯迅「題三義塔」の詩の最後に「劫波を渡り尽くせば兄弟あり、相逢
うて一笑、恩讐は滅ぶ」の名言があります。

一衣帯水の日中両国ですが、細い川ではなく大海を挟んでおり、東シナ海では現在国家間で
は渡る事が出来ない様な「劫波」が吹き荒れています。尖閣諸島・歴史や靖国問題で、「相逢
うて一笑」どころか両国首脳会談もできない深刻な状態が続いている。日中国交正常化以降、
深刻な日中関係悪化の中で、この名言と両国の先人達の活動の歴史を踏まえ「民を以て官を
促す」具体的な新たな活動がより一層重要になってきていると思います。

設立15周年記念式典は18時より開催され、駐大阪中国総領事館王軍副総領事、魯迅記念
館訪日団(5名)、自治体及び各議員団、日中友好団体代表等約200名が出席されました。

冒頭の挨拶で田中潤治会長は、日中国交正常化40周年記念事業と計画したが、尖閣問題で



中止に追い込まれ、本年実現できた王錫榮館長との相談経緯を説明すると共に「学究、融和、人間愛に生き、日本と中国の友好に尽くし、豊中で生き、生涯を終えた西村真琴・魯迅そして日本人達との秘められた物語」（主旨）に学び、ますます不安定化に向う国際情勢の中、相互に協力しあえる民間交流機関として努力することを述べられました。懇談夕食会では、旧知の方も非常に多く参加され、今後の日中友好活動の方向性含め意見交換が出来ました。



思い起こせば、2009年関西日中平和友好会「浙江省杭州市訪中団」の訪問先に紹興市が予定され、魯迅故居付近(上写真)の散策などを行ったが、私と高田事務局長2名は別行動となり江蘇省塩城市人民政府に表敬訪問に向った為に参加できなかった。今回頂いた小雑誌「革命作家・魯迅先生を語る」を読んで、本名が周樹人、ペンネームが魯迅であることや革命作家としての思想性を知り、その精神を継承した一人が周恩来総理(原籍：紹興市)である事も納得できた。次回、上海を訪れる際には魯迅記念館を是非訪れる事を約束して、王錫榮館長ともお別れしました。

最後に、豊中市日中友好協会の益々の発展を祈念すると共に、府日中の地区協会とも連携を深めて行きたいと思っています。各日中友好団体の固有資産を生かし、時代変化に応じた会の運営に非常に参考となりました。運営に当たられました各位に感謝申し上げます。



田中会長講演会挨拶



王軍副総領事祝辞



豊中日中設立記念式典様子